

『シャーロット・ブロンテの生涯』研究 (12)

チャドウィック その2

芦澤久江

1. はじめに

チャドウィック (Ellis. H. Chadwick) は 20 世紀初頭、ブロンテ研究において大著を物した。前項で述べたように、その著書のなかで『キティー・ベル』 (*Kitty Bell, the Orphan*) について問題提起を行ったが、それはチャドウィックが初めてであった。チャドウィックによれば『キティー・ベル』と『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) は類似した点が多くあることから、『キティー・ベル』はシャーロット (Charlotte Brontë, 1816-55) が書いたものと想定できる (402)。主人公のキティーもジェインもともに孤児であり、女学院で恵まれない幼少時代を過ごした。また『キティー・ベル』に描かれている教室風景は『教授』 (*The Professor*, 1857) の描写とまさに同じものであった (Chadwick 405)。しかしその後、『キティー・ベル』は誰が書いたのかという問題については何の展開もみられない。それどころか今日では、『キティー・ベル』についての存在さえ知らない研究家も多い。しかし『キティー・ベル』の作者が誰であるかを調査することは、ブロンテの伝記のみならず、作品研究においてもたいへん重要な課題である。なぜなら『キティー・ベル』、『教授』、『ジェイン・エア』を比較考量する際、内容の類似性だけでなく、文体も問題となってくるからである。『キティー・ベル』を研究することは、とりもなおさずシャーロットの文体論を展開することに繋がるのである。

これ以外にもチャドウィックはブロンテの伝記研究において幾つか大事な指摘を行なっている。したがって、小論では、引き続きチャドウィックの掲げた問題について考察してみたいと思う。

2. ギャスケルとエミリ・ブロンテ

ギャスケル (Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65) の伝記では、シャーロットが中心に描かれ、エミリ (Emily Brontë, 1818-48) についてはほとんど語られていない。残された資料や著者とシャーロットとの関係という点から見れば、これは当然のことであった。生涯、エミリには友人がいなかったため、その実像を語ることはほとんど身内の者に限られていた。またエミリ自身が、自分の書いたものをすべて破り捨てるという秘密主義者であったことも災いして、書かれた資料はほとんど残されていない。このような事情からエミリに関しては、シャーロットの残した資料に依存しなければならなかったのである。

そのためギャスケルがシャーロットの伝記を出版してからも、しばらくの間エミリの伝記研究は行なわれなかった。ところが早々と 1850 年にシドニー・ドウベル (Sydney Dobell, 1824-74) が『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*, 1847) を評価し (165-6)、続いてスウィンバーン (Algernon C. Swinburne,

1837-1909) もまた 1883 年にエミリの才能を賞讃した (261)。すると研究者はこぞってエミリをもてはやすようになった。メアリ・ロビンソン (Mary Robinson, 1857-1944) もその一人であるが、ロビンソンはシドニー・ドゥベルやスウィンバーンの批評を踏襲しているとはいえ、エミリを真摯に理解しようと努めた点で他の研究者と異質であった。しかしそのロビンソンでさえエミリの実人生について新たな事実を発掘しているわけではない。これは前述したように、エミリの伝記研究がいかに困難であるかということを示しているものである。

しかしギaskellがほとんどエミリに言及しなかったのは、根本的にギaskellがエミリを理解していなかったことにある。多くの研究家と同様に、チャドウィックもまた、ギaskellがエミリを理解していなかったと指摘している (329)。敬虔深く道徳的なギaskellにはとうていエミリに共感など持てるはずはなかったのである。ギaskellはエミリとアン (Anne Brontë, 1820-49) の性格について次のように比較している。

The first impression made on the visitor by the sisters of her school-friend was, that Emily was a tall, long-armed girl, more fully grown than her elder sister, extremely reserve in manner. I distinguish reserve from shyness, because I imagine shyness would please, if it knew how; whereas, reserve is indifferent whether it pleases or not. Anne, like her eldest sister, was shy; Emily was reserve. (*Life* 147)

ギaskellは「寡黙」と「恥ずかしがり屋」を区別して、アンは恥ずかしがり屋だが、エミリは寡黙だと述べている。これはギaskellがアンには好感をもっているが、エミリについては暗に彼女を批判の対象にしていることを示している。ギaskellにとってエミリは理解しがたい人物であり、エミリの寡黙さは生来の人見知りとは違い、気分屋としか映らなかったであろう。

特にエミリは死を前にしたとき、シャーロットが何度も医者に見てもらおうよう懇願しても、頑として医者も薬も拒否し続けた。シャーロットはエミリの死に対する勇敢な行動を称えるつもりでこのエピソードを語ったが、ギaskellはそのようには受け取らなかったであろう。おそらくギaskellは、周りの心配を無視して自分の意志を貫こうとするきわめて自己中心的な性格だとエミリを見ていたと思われる。

チャドウィックはギaskellがエミリ自身だけでなく『嵐が丘』についてもまったく価値を認められていなかったと指摘している (329)。これは確かに事実であろう。なぜならギaskellは『嵐が丘』どころか、シャーロットの『ジェイン・エア』を読むことさえ、子どもたちに認めていなかったからだ。ギaskellはジェインの境遇に同情しながらも、ジェインの生き方を全面的に肯定していたわけではない。愛を自ら告白したり、決してレディとは言えない粗野な振る舞いを見せるジェインをギaskellは敬遠していた。それゆえ『ジェイン・エア』以上に情熱的で非道徳的な世界を描いている『嵐が丘』をギaskellが受け入れられなかったのは道理である。

しかしチャドウィックは『嵐が丘』のあらすじがギaskellに影響を与えたと述べている (329)。

ギaskellが『嵐が丘』のあらすじを『シルビアの恋人』(*Sylvia's Lovers*, 1863)に取り入れているというのである。たとえばそれぞれの主人公キャッシー (Catherine Earnshaw) とシルビア (Sylvia Robinson) には共通点がある。二人には婚約者がいる。それがエドガー・リントン (Edgar Linton) とフィリップ・ヘップバーン (Philip Hepburn) である。ところが主人公たちは婚約者がいながらも別の男性、ヒースクリフ (Heathcliff) とチャーリー・キンレイド (Charlie Kinraid) を愛する。一時行方をくらましているヒースクリフとキンレイドはキャッシーとシルビアが結婚することを知り、また戻って来る。特にキンレイドが戻って来る場面はドラマチックだとチャドウィックは述べている (329)。

確かにチャドウィックの見解は興味深い。ギaskellはエミリ自身や『嵐が丘』を理解できなかったとしても、『嵐が丘』のドラマチックなあらすじにインスピレーションを受け、自分の作品にその劇的な場面と展開を取り入れたのかもしれない。ギaskellは手紙や会話など日常の何気ない話から着想を得て、それらをドラマチックに語ることに優れていたと言われている (Uglow 237)。それゆえ、『嵐が丘』がギaskellの想像力に火をつけたということはある程度である。ギaskellの作品と『嵐が丘』の類似性を述べたのはチャドウィック独自の見解であり、この二作品の比較検討はさらに進展させる余地があると思われる。

3. エミリの詩

チャドウィックはエミリがロー・ヒル (Law Hill) でもっとも多く詩を書いたとしている (129)。チャドウィックはエミリのロー・ヒル滞在期間を 1836 年から 1839 年にわたる 3 年間と考えていたので (123)、この時期にエミリの詩が多く残されたと考えた。ところが実際、エミリのロー・ヒル滞在期間は 1838 年秋から 1839 年 3 月ころまでのたった半年にすぎなかった。したがって、チャドウィックがエミリの詩においてインスピレーションの源はロー・ヒルにあったとする見解は明らかに誤りである。チャドウィックが活躍していた時代、すなわち 1910 年代はエミリについて解明されていない部分が多かったため、そうした誤りが生じたのであろう。チャドウィックのこのような誤りから、伝記研究が作品研究においてどれだけ重要な役割を果たしているかがわかる。言い換えれば、作品研究は伝記研究を基礎として行われるべきだということである。

それでは、ここでチャドウィックがどのようにエミリの詩とロー・ヒルの関係を考えていたのか見ておこう。チャドウィックによれば、「しばらくの間 しばらくの間」(‘A little while, a little while’) はロー・ヒルで書かれたものである (129)。この詩が書かれた時期についてはチャドウィック以外にもさまざまな人たちが論争していたようである。ロビンソンは、この詩がブリュッセルで書かれたと述べ (82-3)、シンクレア (May Sinclair) もまた同様の意見を述べている (180)。それではこの詩を引用してみよう。

A little while, a little while
The noisy crowd are barred away—
And I can sing and I can smile—
A little while I've holiday!

Where wilt thou go may harassed heart?
Full many a land invites thee now;
And places near, and far apart
Have rest for thee, my weary brow—

There is a spot mid barren hills,
Where winter howls and driving rain,
But if the dreary tempest chills,
There is a light that warms again.

The house is old, the trees are bare,
And moonless bends the misty dome,
But what on earth is half so dear—
So longed for as the hearth of home? (ll.,1-16)

この詩には話者が「しばらくの間」解き放たれて、一人瞑想すると、なつかしいわが家を思い出すという場面が描かれている。エミリはロー・ヘッド (Roe Head) で晩を自由に過ごすことができたが、ロー・ヒルでは11時まで働かなければならず、詩で詠われている労苦はロー・ヒルでの労働を指しているのだとチャドウィックは主張している (130)。しかしこの詩がブリュッセルで書かれたとするなら、ここでのエミリの苦悩はエジェ塾で経験したものとなる。しかしこの詩で詠われるほどエミリは孤独を感じていなかったにちがいない。なぜならシャーロットがそばにいたので、エミリは孤独ではなかったとチャドウィックは述べている (130)。

Yes, as I mused, the naked room,
The flickering firelight died away,
And from the midst of cheerless gloom
I passed to bright, unclouded day. (ll.,25-8)

この詩のなかにある「ちらちらとする暖炉の明かり」(‘the flickering firelight’)¹はウラー先生 (Margaret Wooller, 1792-1885) の学校の暖炉でもなく、ブリュッセルの暖炉でもない。シンクレ

アは、当時ブリュッセルでは暖炉ではなくストーブが使われていたので、これは暖炉の明かりではないと指摘しながらも、この詩がブリュッセルで書かれたと述べている (180)。こうした意見に對抗して、チャドウィックはこの詩の情景はまさに孤独なロー・ヒルでの明かりだったと反論している (130)。

今日ではハットフィールド (C. W. Hatfield, 1876-1941) の研究において、この詩は 1838 年 12 月 4 日に書かれたものとされている (93)。前述したように、チャドウィックはエミリのロー・ヒル滞在期間を 3 年間ととらえており、明らかに誤っているが、この時期はエミリがロー・ヒルに滞在していた時期と重なっている。したがってこの詩に関してはチャドウィックの見解が正しい。詩のなかで述べられている「労苦」はまさにロー・ヒルでの辛い毎日であり、エミリは一日を終え、ようやく解放され一人瞑想にふける。ヴィジョンのなかでどこへ行こうかとさまよううち、眼の前に現れたのはなつかしいふるさと、羊が草を食む荒野の風景だったのだ。よく知る風景に歓喜するエミリだが、そうしたヴィジョンはあっという間に消え、彼女は現実の世界に引き戻され、また新たな労苦の日が始まるのである。

エミリはゴンドルの物語詩とノン・ゴンドルの詩を書いていたと考えられている。この詩はノン・ゴンドル詩に属するもので、エミリの個人的心情を吐露したものと見做される。チャドウィックはさらにもう一遍の詩について取り上げ、ロー・ヒルで書かれたものと述べている (132)。次にその詩を引用してみよう。

High waving heather, 'neath stormy blast blending,
Midnight and moonlight and bright shining stars;
Darkness and glory rejoicing blending,
Earth rising to heaven and heaven descending;
Man's spirit away from the drear dungeon sending,—
Bursting the fetters and breaking bars. (ll.,1-6)

チャドウィックはエミリが 1836 年 10 月に家を離れ、ロー・ヒルに赴いたとすれば、1836 年 12 月 13 日付というこの詩はエミリがロー・ヒルで書いた初めての詩ということになると主張している (132)。したがってここに描かれている風景はロー・ヒルのある村サザラム (Southowram) の風景であろうとチャドウィックは考えている (132)。しかしこの時期、1836 年 12 月 13 日はエミリが自宅のハワース (Haworth) にいた期間であり、ここに描かれている風景はロー・ヒルの荒野ではなく、まさにハワースの荒野である。この詩は前述した 1838 年 12 月 4 日の詩と内容的には類似している。したがって日付が示されていなければ混同してしまうのも当然であろう。ここでも現実から逃れてヴィジョンの世界に移行していく様子が描かれ、エミリの神秘的傾向が見られる。この詩もノン・ゴンドル詩に分類されるべきものである。

また別の詩について考察してみよう。1839 年 4 月に書かれた「不在の者」 ('The absent one')

と題された詩はアンの出立を暗示しているのではないかとチャドウィックは考えている (133)。しかしこの詩の題名は「R・グレンデン作」(‘By R. Gleneden’) というもので、明らかにゴンドル物語に属する作品である。チャドウィックはこの詩に題名があることを知らなかったのであろう。それゆえノン・ゴンドル詩だと考えたにちがいない。しかしチャドウィックの主張もあながち間違っているとは言えない。チャドウィックはこの詩の日付を1839年4月としているが (133)、正式には4月17日に書かれている (Hatfield 102)。実際アンがブレイク・ホール (Blake Hall) のインガム家 (The Inghams) に赴いたのは1839年4月8日のことであった。この詩は明らかにアンがハウスを去ってから書かれた詩である。この詩をアンの不在と重ねて読むと、これはゴンドル詩でありながらまさにチャドウィックが述べているように、アンの不在を嘆く詩と読み取れるのである。その詩の一部は次のとおりである。

One is absent, and for one
Cheerless, chill is our hearthstone.
One is absent, and for him
Cheeks are pale and eyes are dim....

So it is by morn and eve;
So it is in field and hall;
For the absent one we grieve:
One being absent saddens all. (ll.,17-20, ll.,41-4)

「ひとりいない者がいる」(‘One is absent’) 「その人のために」(‘for him’) 「いない一人のために ぼくらは悲しみ嘆くのだ」(‘For the absent one we grieve’) これらの詩行はまさにアンがいないことを嘆いているエミリの心情と読むことができる。エミリとアンは双子のようだったと言われている。エミリは家族の誰よりもアンがいないことを悲しんでいたにちがいない。

同じ主題を兄のブランウェル・ブロンテ (Patrick Branwell Brontë, 1817-48) も詠っている。「サー・ヘンリ・ターンストール」(‘Sir Henry Turnstall’) のなかにつきのような詩行がある。

We felt when one has left the home fireside
It matters not though all be there beside,
For still all hearts will wander with that one,
And gladness stays not when the heart is gone,
And—where no gladness is a crowd may feel alone. (ll. 79-83)

この詩が書かれたのは1840年4月15日であるので、アンがブレイク・ホールに出かけた1年後の

ことである。実際にはアンの不在を嘆いているのではなく、姉マライア (Maria Brontë, 1814-25) を想い、その死を悼んで書かれたと思われるが、きょうだいの不在を悲しむという点では同じものであるといえる。²

チャドウィックは、エミリの詩のなかには伝記的関心以上のものがあると述べる (133)。つまりエミリの詩には伝記的言及がないとされてきたが、そうではないとチャドウィックは主張するのである。チャドウィックはエミリの詩だけでなく、エミリ自身を神秘的存在としてとらえることに反対なのだ。すなわちエミリの詩には個人的感情が吐露されているとチャドウィックは強く主張している (133) のである。確かにチャドウィックの説に一理はあるが、エミリの詩をすべて個人的なものだと考えるのは危険であろう。またロー・ヒルでの経験を中心にエミリの詩をとらえようとすることも大きな間違いである。ただし、当時はエミリのロー・ヒル滞在時期が確定していなかったうえに、詩の日付も判明していなかった。そうした点においてチャドウィックが誤った判断を下してしまったのは致し方がないことである。しかし前述したように、チャドウィックの過ちを通して、伝記研究と作品研究は大きく関係しているということが明らかとなった。

4. 『嵐が丘』とブリュッセル

ブリュッセルの留学経験がシャーロットにとってターニングポイントであったということはリード (T. Wemyss Reid, 1842-1905) も認めるところである (72)。しかしギヤスケルはエジェ (Constantin Heger, 1809-96) へのシャーロットの想いを知りながら、それはあくまでも友情であり、恋慕の情ではなかったとした。ところが、1913年7月29日、4通のエジェ宛のシャーロットの手紙が『タイムズ』紙 (*The Times*) に公表された。このことによりシャーロットの伝記は大きく塗り替えられた。手紙が公表されてから一年間、批評家たちはこぞってブリュッセル時代を取り上げ⁴、『ジェイン・エア』、『ヴィレット』の作品研究にも大きな影響を及ぼした。

チャドウィックもそのうねりに加わった批評家の一人である。彼女はブリュッセル時代のブロンテ姉妹の足跡を辿り、その研究成果をこの著書にまとめた。チャドウィックの研究調査にしたがってエジェの生涯を考察してみよう。

エジェ氏は1809年7月10日、ジョウゼフ・エジェ (Joseph Antoine Heger) とマリー (Marie Therese Mare) の息子としてブリュッセルで生まれた。21歳のとき、エジェはマリー (Marie Josephine Noyer) と結婚したが、彼女は1833年9月26日に亡くなった。その後1836年9月3日エジェ夫人 (Claire Zoe Parent) と再婚した。二人には六人の子どもが生まれた。マリー (Marie Pauline Emma) が1837年9月20日、エリーズが (Elise Marie Loise Florence) 1839年9月20日、ユージンが (Eugene Claire Zoe Marie) 1840年7月27日、プロスペール (Prosper Edouard Augustin) が1842年3月28日、ジュリー (Julie Marie Victorine) が1843年11月15日、マリー (Marie Francois Xavier) が1846年12月14日に誕生した。二人の息子のうち、兄のユージンはエンジニアとなったが、チフスにかかり、1867年1月13日赴任先のトーキー (Torquay) で亡く

なり、そこで埋葬された。もう一人の息子は医者となり、長年ブリュッセル大学の医学部教授であった。

1886年9月3日エジェ夫妻は金婚式を迎え、9月4日に『インデペンデンス』(*L'indépendance*)で彼らの功績が称えられ、特にエジェ氏の幼い子どもへの教育技量について高く評価された。エジェ氏が1896年5月6日に亡くなると、5月9日には『インデペンデンス』がその死亡記事を掲載した。その後、前述したように、1913年7月29日、元生徒のシャーロット・ブロンテの手紙が公表された。こうしてエジェ氏の死後17年にしてシャーロットのエジェ氏に対する恋慕の気もちが世界の知るところとなり、ブロンテ研究の流れを一変させたのである。

手紙が公表される前からブロンテ研究家たちはエジェ氏とシャーロットが恋愛関係にあったことに気づいていた。エレンがシャーロットにブリュッセルに婚約者がいるのではないかと尋ねている手紙をリードは引用したものの、確証までには至らなかったため(72)、暗示するに留まった。ショーター(Clement K. Shorter, 1857-1926)もまたシャーロットがエジェ氏を賞讃していたというホイールライト(Lætitia Wheelright, 1828-1911)の証言を得ながらも、シャーロットがエジェ氏に恋をしていたという点については認めていない(108-9)。シンクレアの見解はさらに屈折していて、シャーロットは恋をしていたかもしれないが、彼女自身は純粋なためにそれに気づいていなかったと述べている(75)。このようにエジェ氏への手紙が公表される以前から、シャーロットとエジェ氏との関係は人々の間で話題となっていた。しかし何の証拠もないため、二人の関係は憶測で云々されるしかなかった。ところがエジェ氏宛のラブレターが公表されると批評家たちは一斉にロチェスター(Edward Rochester)やポール・エマニュエル(Paul Emanuel)のモデルはエジェ氏だと述べるようになったのである。³

チャドウィックはエジェの影響はシャーロットだけでなく、エミリの作品にも及んでいたと主張している(329)。シャーロットの作品に比べると『嵐が丘』は場所や人物のモデルを特定することがむずかしい。ハワース近辺にそのモデルを辿れば、サウデンのグリムショー(Grimshaw)の家が挙げられるとチャドウィックは指摘する(321)。その家の門には「H.E.,1659」という文字が彫られ、嵐が丘の門と「ヘアトン・アーンショー1500」という文字を彷彿させる。ただしそこには嵐が丘にある「グリフィン」や「裸の天使」は彫られていない。さらにハワースのトップ・ウィズンス(Top Withins)、ロー・ヒルのサザラムもまた嵐が丘のモデルであったと考えられるとチャドウィックは述べているのである(321)。

しかしチャドウィックのユニークな指摘は、エジェ氏こそヒースクリフ(Heathcliff)のモデルであるということである(Chadwick 332)。チャドウィックがそのように述べる根拠は以下のとおりである。まず、エジェ氏はエミリが初めて出会った異性であり、エミリは彼の精神と自分の精神が一致していると感じていた。ロックウッド(Lockwood)がヒースクリフに初めて会ったとき、風変わりで不愛想だという印象をもったが、エミリもエジェ氏に対してまったく同じ印象を受けた。エジェ氏は服装に無頓着で、彼女たちがエジェ塾に着いてから何か月も話しかけず、練習帳の余白に彼女たちが書いたエッセイのコメントを書くだけであった。1842年5月17日、エミリはブリュッ

セルで詩を書いたが、それは愛する者を失った恋人の悲しみが綴られている。これはエジェ氏が最初の妻を亡くしたときの深い悲しみにインスピレーションを受け、エミリがそこから着想を得たにちがいない。またエジェ氏が最初の妻を失ったという悲恋話はエジェ塾でも知れ渡っていて、エミリの耳にも当然入っていたであろう。エジェ氏の悲しみはまさにキャサリンを失ったヒースクリフの絶望に通じているとチャドウィックは主張している (335) のである。

シドニー・ドウベルは『ジェイン・エア』と『嵐が丘』の作者の正体を誰も知らないとき、『ジェイン・エア』も『嵐が丘』も同じ作者が書いたものだと推測した。エミリがシャーロットと同じ人物、すなわちエジェ氏をモデルにしたからこそドウベルの混乱を招いたのだとチャドウィックは無理な理由づけをしている (322)。

チャドウィックがこの大著を出版する当時、すでに述べたようにエジェ氏へのシャーロットのラブレターが公表されていて、ブリュッセル時代のブロンテ姉妹についての評論が次から次へと登場した。したがってチャドウィックもその時代の潮流に乗って、エジェとヒースクリフの関連性を否が応でも作りたかったと思われる。シャーロットの作品のモデルがエジェ氏であるということは間違いないが、エミリがエジェ氏をどのように思っていたかはわからない。少なくともヒースクリフのモデルがエジェ氏だったとは考えがたい。チャドウィックはシャーロット同様に、エミリも現実生活の経験から作品を生み出すタイプの作家だと考えていたのであろう。しかしエミリは現実生活の経験ではなく、想像から作品を創造していた。もちろんあらゆるものが純粋な想像上の産物というわけではない。ハワース周辺で起こったことや民話、サザラムで聞いた逸話、ブリュッセルでの体験、それらが形を変えて『嵐が丘』の部分構成していることは明らかである。それでもヒースクリフのモデルを特定することは至難の業である。なぜならヒースクリフはエミリの想像力のなかであらゆるものが結晶してできた内的産物だからである。

5. チャドウィックの『嵐が丘』批評

前述したように、『嵐が丘』は出版当時酷評され、現在のような高い評価を得られなかった。ところが19世紀後半に至ってスウィンバーンがエミリを賞讃すると (261)、『嵐が丘』の評価が一気に逆転したのはすでに述べたとおりである。チャドウィックの時代には、こうした評価は定着していたので、チャドウィック自身も『嵐が丘』を高く評価している (322)。『嵐が丘』という小説はどのカテゴリーにも属さず、ただ一人立っている (322)。つまり無数の小説の類系のなかでどちらかに偏することもなく、毅然として存在しているということである。

ブランウェルが『嵐が丘』を書いたという説についてチャドウィックは自分の考えを示している。レイランド (Francis A. Leyland)、グランディ (Francis Grandy) たちはブランウェルが『嵐が丘』の物語の一部を読み上げたと言っているが、これは必ずしもブランウェルが書いたことを示す証拠にはならない。司祭館でブランウェルが原稿を見つけて、酒場でまるで自分の作品であるかのように読み上げることは可能である、というのがチャドウィックの見解である (323)。さらに、ブラン

ウエルの詩や散文を読んだ人なら、彼に『嵐が丘』が書けるはずはないと思うだろうとチャドウィックは結論づけている(323)。この結論ははなはだ危険である。なぜならばブランウェルが文学的天才であったことはすでに知られているからである。

『嵐が丘』をブランウェルが書いたという説は今では信じる人も少ない。ブランウェルの死後、彼の汚名を雪ごうとした友人レイランドやグランディが主張したもので、確かに根拠はない。しかしチャドウィックはブランウェルの才能では『嵐が丘』を書けなかったと断定しているが、果たしてそうだろうか。わたしは『嵐が丘』をブランウェルが書いたと主張するつもりはないが、ブランウェルは偉大な才能の持ち主であり、多くの傑出した詩作品や散文を残している。事実ブロンテたちが子どものころ書いて遊んでいた初期作品はブランウェルのリードのもとで行なわれていた。ブロンテの文学の源泉はブランウェルの創意工夫から生まれたものであり、姉妹の作品はそこから枝分かれしていったと考えるべきである。またブランウェルの詩にはエミリと共通したテーマが見られる。たとえば、罪、死、復讐、憎悪である。ブランウェルもエミリと同じように、死とつねに向き合っていた。幼いころに母親を亡くし、母親代わりだった姉マライアも失い、子どもの頃からつねに喪失感を抱いていた。マライアを失ったときから、彼は神を信じることができなくなっていたのだ。

ブランウェルは詩のなかで、ペルソナ、アザレルに「神はいないのだ」(‘There is no God’, l.190)と叫ばせている。壮絶なこの言葉からブランウェルの実人生とは一体どのようなものであったであろうかと思わざるを得ない。一般的にブランウェルは放蕩三昧の暮らしをし、酒とアヘンに溺れ自滅したと考えられている。一人息子として甘やかされ自堕落なブランウェルというレッテルを貼られ、スウィンバーンには「悲しい、情けない卑劣漢」(‘lamentable and contemptible caitiff’)とまで呼ばれた(263)。しかし、彼は人生をそれほど気楽に生きていたわけではなかった。

それはギャスケルがシャーロットの伝記を世に問うた際、シャーロットの悲しみがエジェに対する失恋によるものであった事実を隠すために、ブランウェルの失意、放蕩を槍玉にあげ、彼を犠牲にしたからである。彼は詩的才能をもっていただけでなく、哲学的瞑想の末、「神はいないのだ」とペルソナに独白させるほど精神的高みに昇りつめ、この世の不条理を嘆き孤高のなかで苦しみ喘いでいた。この世でのブランウェルの苦しみは『嵐が丘』におけるキャサリンを失くしたヒースクリフの悲しみにも匹敵するものであったであろう。エミリ自身もまた苦しみしか与えない神に慈悲はないのかと問っている。エミリとブランウェルは一種の精神共同体として同じ悩みを抱え、葛藤していたのである。

現代になってもブランウェルは正しく評価されているとはいえない。彼は未完小説の物語を除いて小説こそ残していないが、詩的才能、哲学的精神はブロンテ姉妹に決して劣ってはいない。人々は容易に『嵐が丘』はエミリが書いたと結論づけるが、ブランウェルが書いたかもしれないという可能性も否定しきれない。『嵐が丘』をエミリが書いたか、ブランウェルが書いたかという問題は別として、少なくとも『嵐が丘』はブランウェルのリードの基に生み出された初期作品に原点があると考えられるべきである。しかしチャドウィックの時代にはようやくエミリが評価され始めたばかり

であり、ブランウェルの研究は始まってさえいなかった。しかし今後はブランウェルを研究することにより、エミリ・ブロンテの研究も深まっていくことになると思われる。

6. おわりに

チャドウィックはこれまでの伝記作家が注目しなかった部分に着目している。すなわちブロンテ姉妹のブリュッセル時代についてである。前述したように、1913年にエジェ氏宛てのシャーロットの手紙が公表されると、それから1年間はブリュッセル時代を中心にした研究書が続々と出版された。チャドウィックもそうした新しい伝記的事実の発見を踏まえ、時流に乗ってブリュッセルに焦点を当てたのであろう。

チャドウィックの最大の功績は何と言っても『キティー・ベル』に言及したことにある。『キティー・ベル』は文学的価値があるわけではないが、誰が何のために書いたのか、またその時代にそれが書かれた意味などを研究する必要があるであろうと思われる。

ただチャドウィックの見解は全体的にそれほど独自のものとはいえない。これまでの主たる研究者の意見を踏襲したにすぎないし、ブリュッセルに結び付けようとして強引な結論を導き出そうとする傾向もある。特にエミリがエジェ氏に影響を受け、エジェ氏をヒースクリフのモデルとしたという主張はいささか受け入れがたいものである。しかしチャドウィックはブリュッセル時代にブロンテ家と関連した人々と実際に面会し情報を収集することによって、エジェ家の家族構成、エジェ家の墓地などの住所を記録に留めている。文学研究においても現地での実地研究は基礎資料として重要なものである。なぜなら現地を訪れることによって新たな事実が発見されることもあるからである。したがってチャドウィックがブリュッセルで行なった実地調査は特に伝記研究者にとって見習うべきものがあるのである。

注

- Hatfieldは‘flickering firelight’ (94) としているが、シンクレアは‘alien firelight’ としている (180)。
- この詩には草稿があり、「Bradford July 31, 1838」となっている。これはブランウェルがブラッドフォードでアトリエを借りていた頃のことである。エミリがブランウェルの下宿先を訪れ、この詩の草稿を読んでいた可能性もある。もしそうだとすれば、ブランウェルの詩がエミリの記憶に残っていて、それが基となって「不在の者」が書かれたのかもしれない。いずれにしてもエミリとブランウェルが類似したテーマで詩を書いていることは興味深い。二人には他のきょうだいにはない親和力があったと考えられる。ブランウェルの草稿は次のように書かれている。
We sat together till the twilight dim
But all the world seemed passed away with him
We gathered close yet could not drive away
The dreary solitude that over us lay
We felt when One has left the bright fireside
It mattered not though all be there beside.
For still all Hearts have wandered with that one.
And gladness stays not when the heart is gone
And, where no gladness is a crowd may feel alone! (ll.,75-83)
- シャーロットのラブレターが公開されると、『ブリティッシュ・ウィークリー』(*British Weekly*)、『ヨークシャー・イブニング・ポスト』(*Yorkshire Evening Post*) などがいち早くシャーロットのエジェ氏への想いについて書き

立てた。シャーロットのエジェ氏への恋心について論じた代表的な批評家としてフレデリカ・マクドナルド (Frederika Macdonald) が挙げられる (Crump 167-72)。

引用文献

- Chadwick, Mrs. Ellis H. *In the Footsteps of the Brontës*. London: Sir Isaac Pitman & Sons Ltd., 1914.
Crump, R. W. *Charlotte and Emily Brontë, 1846-1915 a reference guide*. Boston: G. K. Hall & Co., 1982. 167-72.
Dobell, Sydney. 'Currer Bell.' *Palladium*, No.3 (1878).
Gaskell, Elizabeth C. *The Life of Charlotte Brontë*. Penguin Books, 1987.
Hatfield, C.W. *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*. New York: Columbia University, 1941. 94.
Neufeldt, Victoria A. *The Poems of Patrick Branwell Brontë*. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1990.
Reid, T. Wemyss. *Charlotte Brontë*. London: Macmillan and Co., 1877.
Robinson, A. Mary F. *Emily Brontë*. London: W. H. Allen and Co., 1883.
Shorter, Clement K. *Charlotte Brontë and her Circle*. London: Hodder & Stoughton, 1896.
Sinclair, May. *The Three Brontës*. London: Hutchinson and Co., 1914. 180.
Swinburne, Algernon C. *Miscellanies*. London: Chatto & Windus, 1886.
Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.